

梅雨の長雨に考える日本語の持つイメージ

1 梅雨の季節に考える梅雨の語源

現在の日本において、6月には梅雨の季節です。梅雨というのは、毎日のように雨が降るイメージです。6月といえば「梅雨」「紫陽花」「蛙」というようなイメージになりますが、これはやはり日本独特のものではないでしょうか。雨が降るのは、世界各国どこも同じですが、その雨から出てくるイメージは各国や地域によって異なるようです。今回はその「雨」について少し考えてみましょう。

まず、何よりもそのきっかけとなった「梅雨」の語源です。

梅雨というと、四季のある国日本独特の気象である、と考えられることが少なくありません。東南アジアなど熱帯などでは「乾季」と「雨季」という季節はありますが、そもそも春夏秋冬の四季がないので、春と夏の間の梅雨という時期をあまり感じることはありません。またその雨の降り方も、ちょうど夏の終わりの夕立のような降り方で、あまり情緒などを感じる余裕はありません。「ザー」という降り方は、シャワーか何かを浴びているようで、乾いた大地を潤すのではなく、何もなかったところに小さな川が流れるかのような天気ですね。

これに対して、日本の梅雨は、そもそもそれまでの「乾いた大地」というのが存在しません。日本の梅雨というと、最近では異常気象でそのようになっていないこともありますが、しかし、日本人のイメージとしては「しとしと」と、毎日、土砂降りではない細かい雨が降るといったイメージです。このような雨の降り方は日本だけではなく、中国と韓国にも同じ「梅雨」を意味する言葉があります。中国は「梅雨（メイユー）」といいますし、韓国では「長霖（チャンマ）」と呼んで同じような梅雨の雨の降り方をイメージします。

「梅雨」は実は中国で生まれた呼び名であり、その語源には、いくつかの説があります。一つはちょうど「梅の実が熟す頃に降る雨」という意味で、中国の長江流域では「梅雨（ばいう）」と呼んでいたという説です。このことは、現在でも梅雨入りのことを「入梅」を言うような言い方をしますので、「梅」という感じがかなり一般的な言い方であったことを示すのではないのでしょうか。

もう一つの語源は「黴（カビ）が生えやすい時期の雨」という意味で、「黴雨（ばいう）」と呼んでいたが、カビでは語感が良くないので同じ読みで季節に合った「梅」の字を使い

「梅雨」になったという説です。確かに「黴」では、あまりイメージが良くありません。そこでちょうど季節に合った「梅」という漢字をあてたということです。古い時代の中国では、当然に王朝でもこのような言い方をします。宮廷内では、日本でも同じですが、皇帝や天皇、貴族の人々が縁起の悪い漢字を使わないようにする習慣があります。今でいえば「語呂合わせ」のようなところですが、同じ音の漢字を使って表現したり、まったく違う単語に変えてしてしまったりします。

例えば、平安時代の日本では「イワシ」は「賤しい」と音が近かったり、または「魚へんに弱い」と書くので、家格が衰えるといわれて嫌われていました。中国の宮廷内でも「黴」という漢字を使いたくないので、同じような音を出す「梅」にしたということもあるのではないのでしょうか。

では、「梅雨」をなぜ「つゆ」と読むのでしょうか。中国が語源の発祥の地で、中国語では「メイユ」ですから「つゆ」とは読まないはずですが、これは、日本で独自に発展した読み方の語源があります。「梅雨」という言葉は、江戸時代に日本へ伝わり、その頃から、日本でも「梅雨（つゆ）」と呼ばれるようになったのです。その読み方にもいくつかの説があるのですが、それは「露（つゆ）」から連想したというものがあります。まさに、日本の雨は「しとしと」降るようなもので、ちょうど屋根や草木に露が降りたような感じになります。そのために、この「梅雨」と「露」を同じ読み方にしたということではないのでしょうか。このほかにも、「つはる」から連想したという話があります。ちょうど梅雨の時期に梅の実ができるころです。古語で「つはる」とは、木の芽など「新しい命」が外に現れようとする姿をあらわす単語です。人間にこの単語が使われると、妊娠の時の「つわり」になるのです。ちょうど新たな「命」が生まれるということでは、人間も植物も同じであったのではないのでしょうか。この時期は梅の実が出るころという意味もありますが、人間の「つわり」のように、春から夏になるのに、新たな季節を迎えるにあたって苦しんでいる姿が「つはる」という言葉で表現されたのではないのでしょうか。またほかの説では、梅の実が熟し潰れる時期だから「潰ゆ（つゆ）」と関連つけたというもの、または雨が多く黴のせいで物がそこなわれる「費ゆ（つひゆ）」から派生したという説があります。中国の梅雨の語源で「黴雨」という言葉があり、その語源から考えれば、これらの読み方に関しても考えられるものではないのでしょうか。

いずれにせよ、普段使っている「梅雨」という単語一つをとっても、なかなか様々な意味合いがあることがわかります。そして、中国、韓国、そして日本と伝わってくるうちに、もともとの意味と環境によって意味合いや伝わり方が異なってきたのではないのでしょうか。

2 梅雨と五月雨

日本で「梅雨」という言葉が伝わってきたのは江戸時代でした。当然に、江戸時代に、現在のようにテレビなどがあるわけではありませんから、日本全国に伝わるまでにはたい

そう時間がかかったと思います。では、梅雨といわれる前、梅雨のことを何と言っていたのでしょうか。それは「五月雨（さみだれ）」と書いていました。

もちろん、旧暦の五月に降る長雨のことであるために「五月」の雨と書くのですが、「さみだれ」という読み方は、お米の神様である「さ」が、稲作に最も不可欠な水を垂らしてくれるといういみで「さ・水垂れ」という言い方から「さみだれ」になったとされています。ただし、和歌では「さみだれ」は「乱れる」という言葉の意味と掛けて使われることが多いのも事実です。「晴れ」が安定した天気であるのに対して「雨」は「乱れる」というような感覚もあります。現在でも雨が降ることを「荒れ模様」などと天気予報でいうことがありますね。そのように考えれば「乱れる」という言葉で使われることも理解できないわけではありません。

ただ、和歌などで「乱れる」という単語を使うときは、どうしても淫靡な雰囲気を出してしまいます。日本の場合古代の文学は主に恋愛感情の伝達手段であったと言うこともあります。現在のように直接的な表現をしないため、非常に文学的に優れており、また文化的にも非常に高く評価されますが、本人にとっては、現在の日記と同じで自分の心の中の表現をしていたものではないでしょうか。また、日本の場合、その神の中心は天照大御神であり太陽の光が照らしていると言うことが、正しいことなどの判断基準になります。「お天道様が許さない」などという「お天道様」は「太陽」につながる言葉です。しかし、雨のときは、その太陽が雲によってさえぎられてしまいます。当然に太陽がさえぎられると言うのは「雨」と「夜」で共通ですので、どうしても雨の中のことは夜の世界につながりやすくなってしまいます。もちろんこれは平安時代など明かりの少ない時代の話ですので、現代に生きる私たちはそのようなことを気にしなくても良いのですが。

さて、そのような色恋で平安時代最も有名であったのは「光源氏」、そう、源氏物語の主人公です。

源氏物語の中で「五月雨」で有名なのは「五月雨の品定め」です。これは「帚木」の段のエピソードで源氏が17歳の夏（5月）のこと、五月雨のある夜、宮中に宿直する源氏のもとに義兄の頭中将・左馬頭・藤式部丞などが集って「雨夜の品定め」を行うのです。「品定め」とは、まさに彼らによる女性論であり、理想の女性像を語るというものになります。彼らは、自分たちの理想とするパーフェクトな女性はめったに存在しないと、上品な人よりも中品、要するに中流階級の女性に、個性的ですぐれた者が少なくないという話になります。現在でも男性が集まると、年齢などに関係なく、このような話に花が咲くのは良くあることです。そして生涯の妻を選ぶ基準は、貞淑であること、つまり浮気をしないこと。そして、夫が浮気をして嫉妬をしないことがもっとも良い妻の条件であるという結論に達します。この結論に関しては、皆さんはさまざまな意見があるかもしれません。しかし、この結論に大きく影響された源氏は、その翌日、物忌みに出向いた邸で、源氏は伊予介の妻空蝉と関係を持つことになります。源氏と空蝉の出会いの場面で、非常に有名な場面ですね。そして、源氏はこの後、この「雨夜の品定め」の結論に従ったかのような運

命に身をゆだねることになります。

ちょうど、雨が降って外で様々な作業ができないということもあり、「乱れる」という言葉はいつの間にかそのような「淫靡」な響きを持って日本人に受け入れられてしまったのです。この辺は、「ジューン・ブライド」といわれるような西洋の感覚とは少し異なるのかもかもしれません。日本人が男女の関係を「秘め事」として扱うのは、この辺にルーツがあるのかもかもしれませんね。

3 五月雨と幽霊の切っても切れない関係

さて、「雨」と「夜」は、このように、「日の光が来ない」と言うことでどうしても関連性が強く出てきてしまいます。もうひとつの「夜」の代表格と言えば「お化け」ではないでしょうか。日本人の感覚として幽霊は柳の下で手を下ろして「恨めしや」と細々というイメージがあります。これも熱帯のスコールや夏の終わりの夕立のような雨では、なかなかイメージがわかりません。やはり、日本の梅雨のイメージと同じで「しとしと」と降る雨でなければなりません。

千載和歌集の中で藤原兼輔の歌の中に後一条院かくれさせ給うての年、時鳥の鳴きけるに詠ませ給うけるとして「一こゑも君につげなむ時鳥この五月雨は闇にまどふと」という歌があります。一声だけでも、亡き我が君に告げてほしい。ほととぎすよ、私はこの五月雨の夜、「子を思う闇」に惑っていると、という意味です。これは子の後一条天皇が崩御した年、藤原兼輔がうたった歌で、歌の中に出てくる時鳥は死出の山を越えると信じられたので、その時鳥に亡くなった後一条院に伝言を頼んだ歌です。

この歌にあるように、死後の世界や幽霊や妖怪が出てくるのは夏の雨の夜というのが日本人の定番です。これは幽霊ではなく妖怪の類も五月に出てくるものが異常に多いのです。

二条天皇の治世に、京都を脅かす大事件が起きました。鵺が出たのです。鵺が出たのは皐月二十日頃の夜、頭は猿、胴体は狸、尾は大蛇、手足が虎の姿をした化物でした。源三位頼政が召集され、弓で鵺を退治したのです。大炊御門の右大臣公能公が頼政に対して「五月やみ名をあらはせるこよひかな（五月の闇の中、頼政がその名をあらわした今宵だ）」と上の句を読まれたので、頼政はそれに応えて、「たそかれ時もすぎぬとおもふに（黄昏時が過ぎ、誰が誰だかはっきりしない闇夜となったので、その名をあらわしたのです）」と申し、帝から褒美で賜った御衣を肩にかけて退出したと、現代に伝えられています。鵺というのは想像上の怪物で、実際にこのような怪異が起きたかどうかはわかりませんが、着目すべきなのは、このような怪異が起きた時期を「皐月」としていることではないでしょうか。当時の人々は「皐月」と聞いて、本当のことかもしれないと考えた、それだけ「皐月」は怪異が多いと思われていたということになります。

この「雨と夜と幽霊」というのは、まさに日本の夏の風物詩であり、この伝統は平安の時代から現代まで全く変わることはありません。もちろん、幽霊がいるとすれば、年中構

わず出てくるし存在もしてくる。現に「雪女」のように冬に現れる妖怪もいるのであるが、やはり幽霊などは夏、それも陽が陰った雨の中が最も雰囲気が出ます。そして、その内容は徐々に物語などによって形成化され、人々の意識の中にしっかりと根付くようになります。

江戸時代、上田秋成によって「雨月物語」が発表される。これは全5巻、9篇の構成の幽霊話ばかり。それもおどろおどろしいものから、切なくなるような話まで様々であるが、当時の古典を踏まえつつ和文調を交えた流麗な文を編み、日本の要素や独自の部分を混ぜ、著者の思想が加えられており、なかなかの名文であるために、現代も多くの人に読まれ、朗読会なども行われています。怪異小説の代表的な作品の一つですね。

今回は、その幽霊話中心ではなく、この物語集の名前です。「雨月物語」という題は、どこからきたのでしょうか。秋成自身の序文には、書き下すと「雨は霽れ月がは朦朧の夜、窓下に編成して、以て梓氏に昇ふ。題して雨月物語と云ふ」という一文があり、雨がやんで月がおぼろに見える夜に編成したため、とかいてあります。実際に、この物語の中においては、幽霊が出てくる場面は雨や月のある情景のなかで情緒的に書かれており、その表現が非常にうまく書かれています。まさに、幽霊文学の大作ともいえる「雨月物語」は、「雨と夜と幽霊」というこの組み合わせをより情緒的に表現するという形にこだわっているといえます。そして、これが日本の「雨」のイメージになっているのかもしれませんが。

4 五月雨を集めてはやし最上川

さて、「雨月物語」と同じ江戸時代、五月雨で最も有名な一句が出てきます。松尾芭蕉の奥の細道に出てくる代表的な一句「五月雨を 集めてはやし 最上川」です。

奥の細道にあるこの句について書いた全文を現代語訳で書いてみましょう。

「最上川は、同国米沢を源流とし、山形を上流とする川である。基点や隼などという恐ろしい難所のある川だ。「みちのくにちかきいではの板じきの山に年へて住ぞわびしき」の歌枕で有名な板敷山の北を流れて、最後は酒田の海に入る。川の左右が山に覆われているので、まるで茂みの中を舟下りするようなことになる。この舟に稲を積んだのを稲舟といい、「もがみ川のぼればくだるいな舟のいなにはあらず此月ばかり」と詠われたりしている。白糸の滝は青葉の木々の間に落ち、源義経の家臣常陸坊海尊をまつる仙人堂は河岸に隣接して立っている。水を満々とたたえて舟は危うい。」

この句は、もともと、「五月雨を集めて『涼し』最上川」と句を披露したようなのです。しかし、この奥の細道の文章にあるとおり、芭蕉が渡し船に乗った時、その船が濁流にのまれそうになって非常に危なかったというエピソードがあったのです。そこで芭蕉は「涼し」を「早し」にかえて、周辺の水を集めて最上川へ流れこみ、その水量と勢いを増し、

舟をすごい速さで押し流すその勢いを表現したものです。「涼し」を「早し」に変えただけで、句のイメージはここまで変わります。日本語の「一言」は、その言葉そのものが一つの魂を持っているかのように、文章全体の意味を大きく変えてしまう大きな力を持っているものです。

さて、芭蕉は「五月雨」をどうして使ったのでしょうか。最上川に関しては、芭蕉が見て、渡し船で体験した経験を表現しているのですぐにわかります。五月雨というのは、一つは「涼し」のほうを読んだ時が本当に5月であったということがあげられます。また、「五月雨」が「夏の季語」であるということも一つではないでしょうか。

しかし、芭蕉はこの「五月雨」という中に二つの意味を込めているのではないのでしょうか。五月雨を集めるということで、最上川の豊富な水の量をうまく表現しています。五月雨という単語そのものが、「長く続く雨」であり、また「しとしとと降る雨」が「集まって豊富な水量になる」というようなことを表現しているのです。もう一つとして、和歌でよく使われた「乱れる」という意味合いも強く表現したのではないのでしょうか。もちろんここでは「川の流れが乱れている」ということであると思います。ここで「五月雨」と詠むことによって、水の量の多さや流れの速さ、そして流れが難しく流れている状態などを一つの言葉で表現しているのです。

奥の細道では、このほかにも平泉中尊寺金色堂で詠んだ「五月雨の降のこしてや光堂」という句もあります。あたりの建物が、雨風で朽ちていく中で、光堂だけが昔のままに輝いている。まるで、光堂にだけは、五月雨も降り残しているようなことではないか、という句の意味があるのですが、やはり、「雨で朽ち果てる」ということと、「光」という単語を対比させて中尊寺金色堂の素晴らしさを表現しているのです。同時に「乱れて朽ち果てた建物」と「光輝いている金色堂」ということも、五月雨の「乱れる」という意味から出てくるのではないのでしょうか。

俳句は、世界で最も少ない文字数の文学とされています。しかし、その17文字の中に様々な意味を表現することができます。まさにこれは、「五月雨」のように、一つの単語で様々な意味を持つことができる日本語特有の文学ではないのでしょうか。特に、最上川の句のように、たった一つの言葉を変えるだけで区全体の意味や雰囲気を一変させることができるのです。日本語は、このように非常に趣深く、また非常に奥の深い言葉になります。このようなことから「言霊」ということが言われるようになるのではないのでしょうか。一つの言葉から出てくるイメージ、そのイメージが作る世界観を日本人は大事にしているのです。

5 五月雨と梅雨とその季節の花、アジサイのイメージ

では、改めて五月雨のイメージを考えてみましょう。まさに「五月雨」「梅雨」「雨」の言葉のつくるイメージとその世界観を見てみるとよいのではないのでしょうか。

「五月雨式」というような単語があります。これは梅雨時の雨のように途中、途切れながらもだらだらと長く物事が続くこと、また、そのようなやり方のことを言います。もちろん、このような言葉が使われるときは、あまり良いイメージで出てこないのです。現代社会の中では、結論を早く正確に出すことが求められるために、五月雨式に、結論も出さずのりくりと引き延ばしているのは、現代社会のビジネスなどには全く適合しない状態になってしまいます。

しかし、逆に言えば、それだけ長く続かせるだけ「続ける力」があるということもありますし、「一気に結論を出さない」ということは「考える時間をゆっくり持つことができる」または「ゆとりを持つことができる」というようなことが考えられる。まさに現代社会で最も気を付けなければならない「拙速」を防ぐという意味では、ある一定の価値を持つことが可能となります。

ある意味で「必要悪」のような感じで、雨という天気が多くの人に嫌われながらも、一方で、雨が降って水が出なければ、食料も飲み水もなくなって困ってしまうというような、そのような感じが「五月雨」という単語に込められています。季節や自然現象を、人間の行動に当てはめて表現するのも日本人の得意な表現方法です。五月雨式という単語の中には、まさにそのようなことが言えるのではないのでしょうか。

それにしても、やはり日本人は雨が嫌いなようです。スカッと雲一つない晴れを「日本晴れ」といいます。太陽の神が日本の皇室の祖である「天照大御神」であるということを考えれば、雨を降らせる雲は太陽神を隠してしまう現象ですからよくないということになります。このことは「雨」「五月雨」という単語ではなく、この季節を象徴する植物にも影響を及ぼしています。

この梅雨の時期を代表する花としては「アジサイ」があげられるのではないのでしょうか。まず「紫陽花」という漢字を当てますが、これは誤用のようです。本来の「紫陽花」とは、唐の詩人の白居易が命名した、別の紫の花のことでしたが、平安時代の学者、源順が今のアジサイにこの漢字をあてたため誤用がひろまったとされています。アジサイはもともと日本原産で、日本特有の花のようです。また古代から日本人に楽しまれていた花で、万葉集にも読まれています。

「言問はぬ木すらあぢさゐ諸弟(もろと)らが練りのむらとにあざむかれけり」大伴家持
ものを言わない木でさえ、アジサイのようにきれいな花で私の心を慰めてくれるのに（あなたは夢にさえ現れてくれない。あなたが私を恋しく思っているという）諸弟らの取り繕った言葉にだまされてしまった。という歌の意味で、アジサイが、色が変わりやすく、しかも実を結ばない花なのであまり良いイメージではうたわれていません。

「あぢさゐの八重咲くごとく弥(や)つ代にをいませ我が背子見つづ偲はむ」橘諸兄
この歌は、アジサイの花が幾重にも重なって咲くように、あなたもいつまでも元気でいてください。アジサイの花を見るたびに、わたしもあなたのことを偲んでいますから、というように、アジサイを幾重にも重なるということから家の繁栄の象徴のような花として

受け止められたようです。

このように、奈良時代にはアジサイの花のイメージは決まったものがなかったので、平安時代の中期までこののちにあまり和歌で歌われることがなくなってきてしまったのです。そして平安中期に『古今和歌六帖』で歌われるようになると、アジサイ→よひら（ガク片が4枚）→宵（よい）という連想を詠み込むようになり、「五月雨」のイメージとともに「夜」「宵」を示すような使われ方になってしまいます。まさに、五月雨のイメージが強すぎるために、そこに大きく影響された花ということになるのでしょうか。

また、平安時代初期に成立した漢和辞書「新撰字鏡」には、アジサイが「草冠（くさかんむり）に便」の字に和訓として「止毛久佐又安知左井」というように表現されています。これは、詳細は良くわからないのですが、アジサイの葉が現在のトイレトペーパーの代わりに使われていたのではないかということが言われ、必ずどの家でもアジサイの気が植わっており、その花を楽しみにしながら、トイレトペーパーのような不定のものを和歌にして読むということにはばかられたのではないとも言われています。平安後期、そして鎌倉時代には、アジサイの葉以外の何かによってトイレトペーパーの代わりが使われるようになったので、また観賞用の花として和歌に詠まれるようになったのではないかといわれているのです。

この辺は、まだまだ研究をしなければならぬ部分かもしれませんが、当時の生活や日本人の心の中をのぞくには、非常に興味深いところなのかもしれません。

いずれにせよ、五月雨、梅雨というと、日本人の中には「雨」「すっきりしない」「じめじめした」というイメージがあり、そして「太陽がない」というイメージから「夜」や「怪しい幽霊」または「乱れる」という言葉を連想するような形になっていったのです。そして、そのイメージは言葉や雨だけでなく、その季節を代表する花であるアジサイにまで広がっていったということになるのではないのでしょうか。

6 乱れるといえば、天下が乱れるということ

最後に、「五月」と「雨」というと、筆者のような戦国時代のマニアにはどうしても忘れられない和歌があります。

天正10年5月28日に、丹波亀山城にあった明智光秀は城下の愛宕権現で連歌の会を催します。織田信長から命じられた中国地方への出陣の準備の時に、あえてこの時期に連歌の会を催し、その中で「時は今 天が下知る 五月哉」の発句を披露したのです。この歌は明智光秀が織田信長に滅ぼされた美濃の名族土岐氏の末裔であることから「時」と「土岐」が掛詞になっており、また「天が下知る」は「天下を知る」と読めます。そして「五月」が出てきます。「天」と「雨」を掛詞にすればまさに「五月雨」になるように、まさに「乱れる」要するに「天下が騒乱」ということをうたった発句であるとされているのです。まさに、この発句こそ、この4日後の6月2日、「敵は本能寺にあり」として1万3

千の兵を率いて織田信長を攻め滅ぼした「本能寺の変」の謀反の決意を示すものであり、この度本望を達したれば、私が天下を知る（治める）との心情を含めた大事の前の心境を吐露した物として伝えられているのです。

「五月雨」を「乱れる」の意味で使った和歌（連歌の発句）で、最も大きく乱れさせたのは、この歌ではないでしょうか。素直に「五月雨」という言葉を使わず「天が下知る」というように、天下という言葉をかけるあたりは、当時の教養人であった明智光秀の和歌の才能の高さを物語っているところではないでしょうか。

この明智光秀の発句に対して、威徳院行祐は「水上まさる 庭の夏山」と続けたといいます。この連歌の会に出席した当時高名な連歌師里村紹巴は、明智光秀のこの発句から明智光秀の謀反の気づいたという。しかし、そのことを知らせなかったために、のちに豊臣秀吉に疑われるようになってしまうのです。当時は武将ではなく連歌師や、千利休のような茶人であっても、高名であり付き合う人が有名な武将であれば、それだけ嫌疑をかけられたり、多くの秘密を知ってしまう機会も少なくなかったのかもしれない。そのために、身の危険にさらされるようなことも多かったのかもしれない。

まさに彼らにとっても「五月雨」の乱れがあったのかもしれないね。

現在は「梅雨」という表現になって、雨で乱れることは少なくなりましたが、それでも、晴れが待ち遠しくなる季節であることは今も、そして日本以外の人にとっても変わらないものなのかもしれません。